

NHKラジオ深夜便「心の時代」

## 幸福への道

——ヒルティ『幸福論』（第三部）「二種類の幸福」「信仰とは何か」から

2008年4月17日、18日放送（4月5日収録）

奥田 昌道

ナレーション 二種類の幸福 本当の幸福とは 病気と幸福 神のそば近くあること 絶えまな  
 い有益な仕事 神の導きの不思議さ 福音書のキリストにぶつかることが一番 まず大切なのは  
 信じよと志す意志 実践的キリスト教 キリスト教の信仰の中心はキリストの復活 十字架と  
 復活と聖霊 どん底で魂が砕かれてこそ 信仰に対する障害 無者キリスト 信仰は最初からす  
 でに無条件 聖霊のバプテスマ 老年における心得 仕事と喜びと感謝

### ●ナレーション

今朝と明日の二回は、京都大学名誉教授奥田昌道さんに「幸福への道」というテーマで、カール・ヒルティの著書『幸福論』を参考にしながらお話しいただきます。

奥田さんは、昭和7年（1932年）のお生まれで、民法特に債権法がご専門です。最高裁判所の判事も務められました。熱心なクリスチャンとしても知られています。

カール・ヒルティは1833年生まれのスイスの法学者で、法律以外にも歴史、社会、宗教、倫理など幅広い教養をもち、『幸福論』『眠られぬ夜のため』などの彼の著書は広く世界で読まれ、1909年77歳で亡くなりました。ヒルティの『幸福論』はいろんな方の日本語訳がありますが、今回は草間平作さん訳の『幸福論（第三部）』（岩波書店発行）を参考にお話しいただきます。聞き手は、ラジオ深夜便「心の時代」の金光寿郎かなみつディレクターです。

### ●二種類の幸福

（金光）今日と明日の二回にわたって、「幸福への道」というようなことで、カール・ヒルティという方の『幸福論』を参考にしながら、奥田先生のその幸福への道についてのお考えをおうかがいしたいのですが。まず最初に、どういうところから取り上げていただけますでしょうか。

（奥田）私は、このヒルティの『幸福論』はたいへん共感を覚えます。特にこの第三部（第三巻）の始めの二つの論説の、「二種類の幸福」「信仰とは何か」「驚くべき導き」がとても興味深いものですから、一番初めの「二種類の幸福」というところから、ちよつとヒルティをご紹介しながら、私の考えを述べさせていたただきたいと思えます。

ヒルティは、ある中世のキリスト教の一著述家の言葉を引用して、こう言います。その著述家の言葉とは、



「（直訳すれば）——幸福には二種類ある。一つはこの世において得られる不完全なものであり、いま一つの幸福は神を見ることに存する完全なものである。という。ヒルティは、

この文章を、その正しい神髄にそうて訳するならば、こうなるであろう。『幸福の種類には二たとおりある。一つはつねに不完全なものであって、この世のさまざまな宝をその内容とする。いま一つの幸福は完全なものであって、神のそば近くあることが即ちそれである。』（岩波文庫『幸福論』（第三部）10頁。以下引用のページ数は同書のページ数を示す）

と言いました、この二種類の幸福を分けて、まず、この世的な幸福、このさまざまな宝を内容とする幸福はどんなものかということを順番にとりあげていくんです。

たとえば、財産を持つことは幸福なんだろうか。いや、財産を持つても、失わないかという心配がある。管理ができるだろうかとか、いろいろなことがある。財産もそれが有意義に用いられるならば非常にプラスだけれども、必ずしもそういえないとか、そのようなことを言う。

次には、名声は幸福であるか。あるいは、仕事と活動はどうか。これに対してはかなり好意的なんですけれども、それには条件がある。

それから、休息は幸福であるか。休息は、本当の仕事をやった後の休息はいいんだけど、休息そのものを求めたら、決して幸福ではない。そんなことを言います。

それから、力、健康はどうだと。力も健康もやがては衰えていく、常に維持していくのは難しいのではないかと。最後にももしろいことを言っています。

「最後に、愛情は幸福であろうか。然り、そして否である。というのは、この世の最も気高い心根の人であっても、ひたすら愛情にのみ身を委ねるならば、必ずそのために破滅するからである。」（14頁）

と。愛情にのめりこみすぎると、たいていは身の破滅に陥るからであると、そんなようなことを言っているんです。そして、結論として、この世的な幸福は、

「以上述べたいろいろな種類の幸福に必ずつきまとっている欠陥は、これらの幸福にはつねに何かが不足していること、あるいは容易に満たしえない条件がそれに伴うこと、少なくともそれらの幸福はいずれもあまりにも不安定であって、ともすると失われそうな懸念をまぬかれないために、時たま幸福を手に入れも、その魅力は殺がれてしまうことである。」

また、真に心の気高い人々にとって、この種の幸福を味わう妨げになるのは、それが万人にひとしく与えられるものでなく、つねに、偶然に恵まれたわずかな人ただけにしか与えられない点である。このことよってこの種の幸福には不正の烙印が捺され、そのために気高い性情の人々はかような幸福を楽しむことを



厭うようになるのである。」(14〜15頁)

そういうことで良心の痛みを感じる。だから、今言ったような諸幸福があつたとしても、それを本当に楽しむことができないうんだと。このようなことを言います。

### ●本当の幸福とは

それでは、本当の幸福と何だろうか。ここからがヒルティの言いたい本論なんでございませうけれども。

(金光) でも、さきほどあげられた、財産にしても、名誉にしても、健康にしても、今の日本の人が一生懸命求めているものということになるんじゃないやございませうか。

(奥田) ええ、それはそうですね。

(金光) やはり、それは不完全であると。

(奥田) 不完全である。それだけを求めていたのでは、ついには本当の意味の幸福には到達できないと、こういうふうに言うんですね。

(金光) では、「それでは本当の幸福とはどういうことか」と、そこへいくわけですね。

(奥田) そうなんです。そこで、ヒルティは、

「ぜひとも幸福を得ようとならば、何よりもまず暗黒の力が

死だとか、罪だとか、闇の力ですね。

決定的に、かつ永久に打破されねばならない。

と、このように言うんですね。

かくて初めて、わたしとはまったく違った見解に立つ、最近歿したばかりの或るドイツの著述家がのべた『人生は補強工事が必要とする』という言葉が、きわめて正しいものとなる。ただ彼はその補強を間違った場所に、すなわち、人間生活そのもののなかに求めている。だが、そこにはいずれにしても、そのような補強力はつねに見出されるわけではなく、老年や病氣、孤独や困窮に際してそういう力は与えられず、それどころか、そのような逆境が相携えておしよせることもしばしばあつて、そうした場合には、元来もつとも強い精神でさえすつかり屈服させられることもある。

われわれは、あらゆる困難に対して常におこたりなく用意されている或る助力を必要とするのである。われわれは自分の幸福を、いつでも得られ、まただれもが得られるものの上に、築かなければならない。われわれが必要とするのは、自分のなかから出てくる力ではない。自分の力でこと足りるのなら、力の不足をさほど痛感しないであらう。

と言います。それでは、人生の本当の補強工事とは何なのであらうかと。

人生のまことの補強工事とは、神のそば近くあることと仕事である。その結果し



ぜんに生ずるものは、あらゆる被造物に対する愛である。ただしこれらは、最初から無造作に得られるわけにはいかないが。

これ以外のものはすべて、人間の心を完全に満足せしめるには、あまりにも卑小である。」(17～18頁)

これは最初からそう簡単に得られるものではないと言うんです。

そうしますと、一体どうしたら得られるのかと。それはやはり、ヒルティは非常に信仰深い方ですから、やはり神さまとの関わりを正しくするということによらなければ、今言ったような、

「神のそば近くにあることと有益な仕事」

なんて出てこないわけです。それでは一体、信ずるなんてできるのかということに対して、ヒルティは平然と次のように答えています。

「極めて秩序整然と造られている宇宙全体を考えてみても、これを創造し、また、いつ何時でもふたたび解体して混沌にかえるという明らかな危険から宇宙を守っている、一つの霊が存在しないとすれば、それはついに説明しがたいものとなる。」

(18頁)

と。ずっと何千年、何万年来、こういう地球が保たれてきたということ自体を見ても、これは人間を越えた或るお方を想定しなければ成り立たないと、そんなことを言います。

それでは、どうしたら信ずることができるか、神さまとは何なのか、ということになってきますが、彼はこんなふう言っています。

「神はまた、明らかに、われわれ人間の思考力をもって完全に理解できたり、あるいは言葉でもっていい表わしうるようなものではなく、いずれにせよ、それよりもはるかに偉大なものである。」(20頁)

だから、ヒルティはそういう、「神は何か」とか、そんなことを哲学的に追究するのではなくて、神さまの御言に、戒めに自分で従うという決心をして踏み出したら、本当のことがわかってくるという、そういう或る種の経験主義なんです。誰でも、神さまを経験したものでなければ、神がいらっしゃるといって、神は愛であるなんていうことを言えないんだと。そのへんも、私は非常に共感を覚えるんです。だから、こんなことを言います。

「最もひどい逆境にあつても決して失われることのない、完全にゆるぎなき幸福感、彼は、「幸福」ではなくて、「幸福感」と言う。

これこそはただキリスト教によつてのみ与えられると信ずる。と言います。それから、哲学を批判しているところがおもしろい。

とくに哲学は、『人生の英智への愛であり、英智への絶えざる誠実な努力』であるというその本来の意義をとくに失ってしまつて、その代わりに、教養の高い人々のための学問的思索の修練所になつてしまつた。……そこには、それに依り



頼む人々にとって絶えざる新生の泉となる、永遠にして滅びない、つねに変わらぬ霊的存在による何らの支えも、見出されないのである。」（22～23頁）  
そのように言います。そして次に、

「ひとはこの霊をばその現実のはたらきにおいて経験することが可能である——また元来、それは経験するよりほかはないものである。そして、この霊が、かつてそのような経験を持った人々に対して、霊自身の存在とその接近とを否みがたい明白さをもって示現する方法こそが、あの比類を絶した幸福感なのである。この幸福感は、このように神の近くにあることと不可分であり、したがって、その実感は現世において当然感得せられるばかりでなく、まさに神の存在の最上の証明として欠くことのできないものである。」（23～24頁）

これが先ほど申しました、経験という、生活の中で神さまを体験するという、ヒルティの態度のように思えます。

### ●病氣と幸福

（金光）具体的な事柄を例にとつてお訊ねしますと、病氣というようなことが現実にあるわけですね。病氣が幸せというのは、これはちよつとなかなか感じられないのでしようけれども、そこでもやはり、神さまの愛といえますか、そういうものが得られるという、そこでも完全な幸福が得られるということになるわけでしょうか。

（奥田）病氣のことについては、私は特に申し上げたいことがあって、用意しておりますので。今、よろしいでしょうか。

「いよいよ病氣とはつきり決まったなら、その人は病氣のあいだ、いつも次の二つのことを念頭においていなければならぬ。

第一に、健康はたしかに貴重な宝であり、しかもたいていそれを失ってはじめて十分その真価を知るものではあるが、だからといって、健康を失えば絶対に不幸になるとはかぎらない。なぜなら、すべての人がときには健康でないこともあり、また実に病氣のまま生涯の大部分を過ごす人も少なくないからである。もし健康でなければ幸福でありえないとしたら、悲しいことであろう。しかしそれは真実ではない。不幸な病人がいるのと同様に、幸福な病人もいる。病氣と幸福とは絶対に相容れないものではない。

第二に、どんな病氣も必ず、なんらかの理にかなった目的を持っている。ひとは熟慮してよくその目的を見だし、それが自分に課せられた務めであるかぎり、これを促進しなければならぬ。ただに健康になるためばかりでなく、回復をさまたげている特殊な障害を除くためにも、このような意志の協力が必要であつて、そうでなかつたら、病氣を誘い出している精神的要素は退散しないのである。そ

れとは反対に、意志の協力があれば、まず病気は耐えられる程度によくなり、最後に、その人に対する目的が達せられたならば、突然病気がなおってしまうことさえ珍しくない。

われわれは右の二つの考えをいだいて落ち着きを得ようと、少なくともためしとみることが出来る。そうした真剣な試みがなされるたびに、まず内的人間の力が高められ、それによって病苦がある程度まで軽減されるという効果が生ずるであらう。」(163〜164頁)

それに加えて、病気のご利益について次のようなことを言っています。

「今日のあまりにも多忙な多くの人たちにとっては、百年前ですよ、

きわめて必要な閑暇、完全な休養、過去や未来を落ち着いて見渡すこと、人生の真の宝についての正しい認識、かずかずのよき思想、自分の持っている一切のよきものに対する感謝などは、ただ病気のときにのみ与えられる。これらのものは総じて、常に健康であれば、ちゃんとした立派な人々からできえ、ともすると失われがちである。」(164頁)

そんなことを言います。その他に病気について言っているところをさらに追加しますと、「たしかに病気の予防や治療については、今後も多く業績が示されるであろうし、この種の知識や設備が進歩することは、いずれも大いに歓迎すべきである。しかし、われわれ現代の人間にとつての主要な問題は、およそそのようなことではない。むしろ、第一に、まるで健康でなければ何事もできず、義務も果せないというふうな、現代人の意気地のない、窮屈な考え方を捨てること。

厳しいですよ。

第二には、健康はたんに自然のものであるばかりでなく、神の賜物であり、したがって、神の誠めにしたがう生活をしなければ長く保持できないという確信を（これは一般にほとんど失われてしまったが）、新たに固めなおすことが大切である。」(165頁)

それから、更にこう言っています。

「およそ『自分の健康のために生きる』とは、あまりにもつまらぬ人生目標である。……しばしば自分の周囲をもことごとく不幸にしてまでも追求するだけの価値を真に持つのであろうか。そして、それは一体どんな目的のためにか。普通は、ただ生活をよりよく享楽するためであつて、有益な行ないをよりよくするためではない。……すでにおおぜいの人々がみじめな健康状態にありながら、申し分のない健康を恵まれた他の多くの人たちよりも、世の中のために多くの仕事をなしてあげてきた。

病気の人がかえつてキチツとしたことをやってきたと。

たとえその人々が単に、病苦のなかでの忍耐力や喜びの実例を示し、そのような境遇にあつてもひとは幸福になれるということを実証するだけでも、それはたいの完全な健康な人々の果たしている事よりもまさっている。しかもこれらの健康な人たちは、その健康をばだれにも感謝する必要のない、当然至極な自分の所有物だと考え、また、健康を楽しむのに誰からもじゃまされたくないし、病苦に悩む人々の姿などを見るのもいやだと思つている者が実に多いのである。」(166頁と、こういうことを言います。それからもう一つ付け加えさせていただきますと、

「少なくとも次の三つのことは、つねに確実である。すなわち、苦しみには終りがあること、ただ早く終るかおそく終るかの違いだけだということ。あせるのは無駄であつて、それはただ苦しみを自分にも他人にも耐えがたいものにするだけだということ。神の力は、強い人においてではなく、かえつて弱い人において力づくよくあらわれること、などがそれである。だからパウロは、自分の経験から『わたしは弱い時にこそ、わたしは強い』と言つてているが、

これは新約聖書のコリント人への第二の手紙第12章の中に出てくる言葉ですけれども、この言葉は、自分の無能を痛感して現在半ばあるいは完全に絶望している多くの人々を、慰めうるであろう。自然の人間は実際にだいに弱くなつて行かないわけにいかない。それは避けがたい自然のなりゆきである。

しかし、人間のうちに宿ることのできる永遠の霊は、この法則にしばられるものではない。すでに多くの病人は、この霊が身体をも健やかにしうることを体験してきた。多くの人にとっては、苦しい病気の時期こそは、救い(癒し)の始まりであり、浄めの火であつて、その火をくぐつて、彼らは地上の楽園へと進んで行つた。そればかりでなく、ほとんど生きとし生ける者にとつて、病気は総じてよりよき生活への通路なのである。」(167頁)

と。こんなふうには、病気というのは我々からしたら避けたいものではあるが、しかし、それにも目的があつて、それを雄々しく受け止めていくならば、無限に素晴らしいことが体験できるんだよと。健康ばかりに恵まれている人よりもかえつて本当の内的な幸せを獲得できるんだよと、そういうことを言うんですね。

「健康は貴重な宝である。健康を所有している者はそのことを感謝し、できるだけ長くこれを保持するよう努めねばならぬ。しかし、病気もまた大きな幸福となりうる。すなわち、病気は一種の浄化作用(カタルシス)であり、健康なときにはなしえなかつたらうと思われる、より高い人生観への突破口となることができる。」(173頁)こんなことを言います。

(金光) そうなつてくると、その病気によつて、今まで気づかなかつた広い人間を越えた働きに気がつき、そちらの方向へも目が開けるでありますよという、病気に対する姿勢も当



然変わってきますでしようね。

(奥田) ヒルティはちよつと耳の痛い言葉を発しているんですけども、

「人間の身体と精神の健康に最も有害なものは、道徳的な欠陥である。

つまり、内的にしつかりした生活をしていなければ、それが引き金になつて病気になることもある。その時にやはり、自分でよく考えて、自分の中のそういうマイナス要因を取り除いていく必要があると、そういうことを言うんですね。

健康な生活や、かなりの長寿や、病気の際の自然の回復力を望むならば、そのよ  
うな欠陥は絶対に除かれなくてはならない。そのほか病気の最大の原因は、酒、  
食べすぎ、空気の悪い運動不足の都会生活、眠る時間にまでくいこむ夜ふかし、  
財宝を夢中に追求することなどである。

では逆に、健康な生活とは何だろうかという、ヒルティの言葉をちよつとご紹介しますと、  
この世の中で最も健康な生活は、清らかな心とすぐれた思想を持ち、たえず有益  
な仕事をしながら単純な生活を送ることである。ほかのどんな健康維持法も、効  
果の点でこれに及ぶものはない。老齢によつて生命力は自然に衰える場合でさえ、  
いぜんとして絶えず増してゆく霊的な力は、その老年期をもほとんど気づかぬう  
ちに越えて、ついに新しい生命に入るまで、ひとを高めて行くのである。」(175〜176頁)  
と、そういうことを言っています。決して病気がただの不幸というものではない、その受  
け止め方だと言うことですね。

### ●神のそば近くあること

(金光) そうすると、この世のことだけ、今自分がやっている仕事、置かれているその境遇  
だけを見るのではなくて、もうひとつそれを高いところからと言いますか、離れたところか  
ら見直す、そのチャンスでありますということでしょうか。

(奥田) そうですね。ヒルティはよく、「永遠の相のもとに」ということを言います。この  
世だけでものごとを考えたら、もうこんな世は生きるに値しないとすら言いたいくらだと言  
う。ヒルティは「倫理的世界秩序」ということをさかんに言うんです。神さまは秩序ある神  
であつて、決してその不義を不義のままに放っておくような方ではない。不合理を不合理の  
まま、不条理を不条理のまま放っておくお方ではないと。

「もしも、世界が、この世が全く混沌であつて、神さまのご意志というものが貫か  
れないなら、私は生きていくかいが無いと思う。」

とまで言う。彼は、神の御意みこころにかなうような生活をするのが最善だということを強調するん  
です。だから、「永遠の相のもとに」というのは、神さまの眼でこの世を見る、この世でそ  
ろばん勘定するのではないという、そういうことですね。

『神のそば近くある』ことは聖書の多くの箇所で、可能な事として明らかに保証さ





れているばかりではない。それはすでに多くの人たちによって、その人生行路において恵み深く経験されたことであり、今日でも、それを経験したいと願うひとりひとりにあかしされることである。

まず消極的な意味で神の存在を証明するのは、完全に神から遠ざかった人間の生活がつねに不満足なものを伴うという事実である。」（24～25頁）

と。神さまから離れた生活には、本当の意味の満足とか幸福はないという、そのことを一言いいます。それから、次にこんなことを言います。

「しかし、比較的によい境遇にめぐまれた人たちにも、体力が弱り、感覚の一部分が衰えはじめると、それぞれ程度こそ異なれ、人生最後の絶望が、にわかに脅威の影を深めながら迫ってくる。

つまり、老齢になると、だんだん死が近づいてくる。

そうなると、ほとんど常に同じような悲劇がくりかえされる。すなわち、ある人々は、彼らに残された最後の享樂に、体裁もかえりみずしがみつき、カルタ倶楽部や毎日のビールや何らかの道楽に慰めを求める。あるいは、日記や手紙や生涯の回想記などによって、若き日の感傷的な思い出にふける。けれども、もし人生全体がある意義と目的を持つとすれば、青年時代だけがとくに人生の理想であるはずがない。なかには、しじゅう怒りや不機嫌のとりことなり、それが心の基調となつて、家族や目下の人々の重荷となる者も少なくない。

まあ何だか、現代を言われているような気がするんですけども、そんなことを言ってます。もつとも彼らみずからそれをつらく感じて、そのためになおさら心の安らぎを失うのである。老いの身になお残る力を『無理に絞り出す』のは無益であり、それだけいつそう早く力を汲みつくすに過ぎない。

力は外から与えられるべきものであつて、涸れかかった自分の貯えからはわき出ないであろう。ついに避けがたい運命として愚かにも頹廢に身をゆだねる人たちは、最も不幸な者である。」（26頁）

「何びとも神から与えられる力がなくては、右にのべた困難をすべてのがれることは、決してできない。この力は、まさに肉体が衰えた時や老年期において、以前にもまして強く発揮され、最後の息をひきとるまで、活力と元氣を与え、つねに喜びと希望で心を満たすものである。

このよろこばしい、そして力強い靈を、おのれ自身のなかからしいて生み出す必要がなく、いわば外から授けられるということは、すばらしい事実である。もちろん、ただいい加減な一時的な願いに対して、あるいは不誠実な心による願いに対しては、それは授けられない。しかし、真理を見いだして、それに従おうとする真剣な熱望、真実の決意がある場合は、どんな捧げ物も祭司もいらぬ。



これは素晴らしいんですよ。ヒルティは当時の教会制度にかなり批判的なんです。それでなくて、本当に神さまと直結しなさいと。捧げ物だ、儀式だ、ではない。本当に心を捧げると、そういうことを言いました、

「ひたすら神に『心を向ける』こと以外のどのような行為も必要でない。そうすれば心の平和が、少なくともある程度、与えられ、しかもそれは次第に増していくことも可能である。」(26〜27頁)

しかも、神さまはそういうことを強制なさらない。自分たちも、この宗教がいいからと決して強制しないと。ただ願うことは、

「われわれの愛するすべての人々のために、この人生が与えうる最上のもの、つまり、神のかたわらにあり、神と平和のうちにあるという実感を持たずに、この世を去ることの決してないように、と切に願わずにはいられない。」

そんなことを途中で言っているんですね。そして、次のように続きます。

ひとたび神の近くにあることを経験したならば、それをふたたび忘れることはできないであろう。そして、そのとき大切なことは、その経験から心を離さないこと、いいかえれば、この霊がふたたび立ち去ることのないように身を保つことである。霊が去るなどということは容易に起こらないものだが、といって、全然ありえないわけではない。そういう場合、普通では説明できないようなことがある。暗黒と恐怖、一切のよろこびの消えさせること、がそれである。しかも、魂がそのような変化に逆らうならば、往々にして精神生活全体がくらやみに包まれ、ついにほんとうの狂気にまで進むことがある。

こういつたことが現れるから、これは気をつけなければいけないと。それに反して、

よりよき声に聞き従う人々にとっては、それ以後人生はきわめて簡単な三段論法でもって進行する。しばしば無意識のうちに、つい心が神から離れるならば、たちまち幸福ではなくなる。これは、彼らが何かに遮られて神のそば近くありえないからで、そのさまたげを取り除かねばならない。しかし、彼らがよろこびの霊のもとにあれば、自分が正しい道を踏んでいること、そしてこの道では真に悪いことには決して出会わないことを、悟るであろう。

こうして、暗い人生にも日の光がさしこむ。

ヒルティは、決して人生を手放して明るいなんで絶対考えていない。困難なこの人生ということを手放しながら、しかし、今言いましたような、神と共にあるということによって神さまの霊が宿ると、何だかよろこばしい魂に自分は変えられていく。そして、暗い人生にも日の光がさしこむ。

人生という芝居(ドラマ)が終るまで、うわべだけ晴れやかな仮面を着け、心は絶えざる悲しみにとざされている。



これが多くの人の現実だと言うんですね。そういう、

代わりに、よろこびの霊が生まれる。このよろこびの霊を宿している人は、その時から軽やかな足どりでこの人生のあらゆる困難をきりぬけて行く。まず、その人の「この世の分」である自分の仕事への興味がわいてくる。

ヒルティは、仕事ということをととても大事にしているかたなんですね。

さらにまた、前には多くの不安や心配をもつてその獲得と確保に努めねばならなかったその他の一切のものが、労せず、神の賜物としてふんだんに与えられ、つまり、財産であれ健康であれ、そういつたものがふんだんに与えられる。

しかも、それをばまことに堂々と心ゆたかに楽しむだけの権威と力を一緒に授けられる。

つまり、やま疚しい思いをいだかなくてすむと言う。

これによつて初めてすべての所有が正当なものとなり、人間は所有物の奴隷でなくて、その主人となる。また、多くの人が無用に心を勞しがちな、いわゆる『正当な人生の楽しみ』もなお無くなるわけではない。ただそれは、よりすぐれた、より確かなもの、恐怖や良心の疚しさをまじえぬものとなるだけである。マタイによる福音書6の32、33の言葉が、そのあとは、きわめて簡明な人生の知恵となり、幸福な生活の手引きとなる。」(28〜30頁)

ここにヒルティはマタイ福音書6章の32節、33節の言葉を引くんですね。

「<sup>32</sup>それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。<sup>33</sup>何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。<sup>34</sup>だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」(マタイ6・32〜34)

ヒルティは、決して幸福自体を目的にするなど言う。神さまの御意みこころに従った生活をしていけば、幸福はひとりでに寄つてくると言う。それが本当に神からの祝福であり、神の保証したもう幸福なんだと。幸福そのものを追求したら、それは結局、人間のエゴを満たすだけになって、それに縛られて、本当は不自由になってしまうと。それがヒルティの言いたいことのように、私は思うんです。

### ● 絶えまない有益な仕事

(金光) それでもうひとつ、今の言葉を日本の生活で考えますと、自分の思うように神さまがしてくださるという。そうなるとこれは、神を求めるとしても、自分が神さまのことを何かお手伝いさんみたいな感じにしているみたいですが、そうじゃないわけですね。



(奥田) それをまたヒルティは言っているんです。現代人は、神が主ではなくて、自分が主であって、神は自分の人生行路にたえず僕しもべとなつて、お従者じゆうしやになつてくつついて、自分の欲望、自分の願いをかなえる、それが神さまだと思つている。だから、自分の願つたことがかなえられないと、たちまち神なんかを信じなくなる。しかも、神からいただく祝福をたくさん求めたがる。それはちょうど、蔵いっぱいみくらに神の祝福をためこんで、そしてあとはもう神さまはいらんよ、これだけたまればもう結構だまと。それを「信仰の資本主義」と彼は言うんです。つまり、貯め込むだけ貯めたら、あとは私は自由にやりますから、もうあなたは御用はありませんと。それをしかも、善いことをするためにそれだけの貯えがいるというふうに分を合理化するけれども、そうじゃないと。

神さまは必要なものを一日一日くださる。本当に一日一日を神さまに依存しながら、信頼しながら自分を委ねていくという、それが本当の理想的な生活だと言うんです。

(金光) 蔵の中に何もなくても、お任せしておけば大丈夫だということですね。

(奥田) そうそう。だから、「一日の苦労は一日で十分だ」というわけです。これに対して、こういうことをヒルティは言っているんですね。いま言ったことが実現するためには、

「しかしそのためには、神に対する確固たる信仰と、たえず神のそば近くあることが、たいせつである。このことがなければ、心を勞しないということは、ただ愚かだといふのに過ぎないだろう。そこで、およそ信仰を持たない、極めてまともな常識をそなえた人々はみな、思いわずらうなといういまし誠めに反対する。また信仰を持つと思ひこんでいる者でも、それがただうわべだけの信条にすぎない場合は、やはり同様である。神に対するほんとうの信仰を持ち、現実に神のそば近くにあるのでなければ、この誠めに従うことは不可能である。」(30頁)

そういうふうに言うんです。

(金光) それはそうですね、やはり、思いわずらいますものね。

(奥田) そうなんです。それで、結論の方に入りますけれども、

「以上すべてもう一度総括して考えてみると、この世で得られる永続的な幸福は、たえず神のそば近くあることと結びついた、同様に絶えまない有益な仕事にある。

神と共にあること、神が近くいてくださること、そして、その中で有益な仕事——これは御意みこころにかなう仕事——それをする事だと。

それとも読者のなかに、神のそば近くにあるということ、いささか『神秘的』にすぎると思う人があるならば、『偉大にして真実な思想に生きる』という表現に、しばらく代えてみてもよい。ただ、そのような思想を、そのみなもとである自分

以外の泉

つまり、神さまですね。

から汲みとらずして常に持ちつづけることは、おそらく困難となるにちがいない。



この二つの大切なもの

つまり、神のそば近くにあるということ、あるいは、神がそば近くに来てくださること、そしてその中で有益な仕事をしつづけるという、この二つのものが、

が共に備わっていれば、どのような種類の人間生活においても、必ずすべてが良くなっていく。その条件が完全に満たされれば、それだけいつそう良くなるし、その生活がこの条件から離れるにしたがつて、しだいに悪くなる。歴史を考察することによって、また、人との日常の交わりにおいて、だれでも常にそれを実験することができる。

これ以外のすべての幸福は、その本性上一時的なものか、あるいは、錯覚に基づくものである。そのような幸福でも、真の幸福のために補助的なはたらきをして、すでに内的に存在するものをなお外的にも完成するということは十分ありうるが、しかし、内的幸福に代わることはできないし、また、外的幸福が失われたからといって、内的幸福までも台なしになることは決してない。

元来、このことはだれでもよく知っているが、しかし、それをみずからはつきり承認して、現実生活の堅固な地盤にふみ入るだけの勇氣をもつ者は少ない。多くの人は、むしろ、この世の生活の悲しみに満ちたありさまを詩や散文で嘆いたり、あるいは、刹那的享樂で一時ごまかそうとしたり、ただ空想や思い出のなかに生きようとしたり、または、せめて他人よりも恵まれた『特別の』階級だという高慢な意識に酔おうとする。しかし、われわれが説く幸福は、それを得たいと願うすべての人に許されるものであり、『この世が与えることのない平和』である。」

(31～32頁)

と、こういう文章で結んでいるんです。

### ●神の導きの不思議さ

(金光) 今のお話をうかがいながら、今の日本人であると、神さまというのはどこにいらっしやるのかという、むしろその辺のところからの質問も出てきそうな気がするんです。神さまというのは、つかまえることが、近くに寄ることはもちろんできるんでしょうけれども、どうすればいいのか。これは大きな問題でしょうけれども、その辺のところはどういうふうに言っているんでしょうか。

(奥田) この『幸福論』の第三部は、一番始めが「二種類の幸福」ということを書いて、第二論説が「信仰とは何か」という。

(金光) あ、そこに問題が出てくるわけですね。

(奥田) そして、第三番目には、「神の導きの不思議さ」という論説が出てきて、本当に信仰の中に生きている人にはこんな不思議なことがいろいろ起こってくるよということを使う



んです。だから、今のご質問の、

「どうやったら神さまを信ぜられるか。どうやったら近づけるか」

というのはちょっとあとに回して、まず、信じていく人にどんな不思議なことがいろいろ起こるかという、その導きの不思議さということについてヒルティが語っているのが第三論説なんです。「驚くべき導き」というタイトルで、これは「出エジプト記」という旧約聖書の中の言葉で、

「私があなたのためになそうするのは驚くべきことである」

という言葉からひろっているんです。さつき、人間と神さまとの関係を「信仰の(精神的)資本主義」と言いましたけれども、そのところをちょっとご紹介します。

「じつさい現代の人間は、その最良の瞬間においてさえ、つねに自分の道を歩こうとし、彼の信ずる神は、助言と保護を提供しながら自分に随伴するはずのものだと心得ている。いったいに現代人は、神をば、いつもその場に居合わせて、自分の気ままな行動を親切に助けてくれる助手にしたいと望んでいる。自分が神の僕ではなくて、むしろ神のほうに、人間の意志とそのたいへん善意で道徳的な決意(そう解したいところだが)との召使だと考えようとする。それどころか、できることなら、毎日、いやもつとたびたび神を心に思ったり、あるいは、荒野を旅するイスラエルの民のように日々のマナを集めたりする必要がなくて、むしろあの穀倉を大きく拡げて、その夜のうちに死んでしまった愚か者のように、一どきに、全生涯用の、またはせめて半生の用に足りるくらいに幸福の貯えを保証してもらいたい、と願うだろう。なるほど表向きの口実は、もうこれからは『つまりらぬ』考えに煩わされる必要がなくなり、この世における神の業に献身できるため、というのである。

しかし実際には、『資本』を所有するためである。それさえあれば、もはやひきつづいて神の助けを必要としなくなり、また、祈りも次第にただ形式だけのものに変わったり、それとも、自分ばかりか子孫の代まで絶対に『心配のない』人たちの仲間に入れてもらったことへの感謝の祈りに変わることができ。限りなく多くのキリスト教徒が、この種の精神的『資本主義』のために滅び去ったり、あるいは少なくとも、彼らが持ちうるし、また持つべきはずの生命力とその働きのとうてい発揮でききそうにもない状態に陥ったりしている。」(94頁)

だから、そういう人は、

「その人は自分勝手な選択を一切すてて、神の導きと命令の下に入る。」(95頁)

という、そういうふうにしななければいけない。そして、ヒルティは次のように言います。

「人間が容易に手放したがる自立性がこのように止んでしまうと、その代わりに、人生における恐怖が消え、形容も説明もできないような内的な安定感がおとずれる。この感情は、経験しなくては分からぬものだが、一度経験すればもはや



忘れられない。なぜなら、それは、魂を力と勇気をもって満たし、前には途方もなく大きかった困難を小さく思わせ、また、以前にはほとんど絶望にかられるほどの自分の弱さをも、我慢できるものと考えさせるからである。」(95頁)

と、こんなことを言います。人間にとって恐怖というのは非常に恐ろしいんだけど、神さまを信じていくと、恐怖とか憂いとかいうのが消えていくと言っています。

「神を信ずる人々にとつては、すべての憂いがしだいに消えて、その代わりに、ある確かな信念が生まれる。すなわち、一切のことが必ず良くなるに相違なく、そして何ごとも、たとえば不幸にせよ、人の悪意や怠慢にせよ、自分の過ちにせよ、ほんとうの禍いわざわをもたらしことはないという信念がわいてくる。これこそ、すでに幾世紀もの長い間、無数の悩める人々に心からの慰めを与えてきたあの有名な言葉によつて、使徒パウロが言おうとしたことである。『神を愛する者たちには、万事が益となるにちがいない。なぜなら、その人たちはある一定の計画にしたがつて召されたのであるから。』(101〜102頁)

これは新約聖書のローマ人への手紙第8章のところに出てくる言葉なんですけれども。

(金光) それでは、一回目はこのへんにして、それは明日、二回目のお話としてうかがいたいと思います。どうも、ありがとうございます。

### ●福音書のキリストにぶつかることが一番

(金光) 昨日のお話をうかがっています、そんなに神さまと共に生きる生活が素晴らしいものであれば、ぜひ、私も神さまと一緒に暮らしたいと思うんですけども、その信仰についてはどういうふうを考えればよろしいんでしょうか。

(奥田) そうですね、ここからは私の考えが入ってくるかもしれませんが。

(金光) どうぞ、どうぞ。

(奥田) それから、ヒルティの或るところを申し上げたい。やはり、神さまは本当に愛の方だということを知ることです。神さまが愛の方だということを知るのは、どうして知ることができるといって、新約聖書の福音書のキリストの言葉、キリストの生きられた生き方、それにぶつかることが一番だと思う。頭で考えても、なかなかそれは究めつくせませんし。われわれは、まあ仏教でいえば、仏さんにすがっていくというか、抱いだかれるというか——ヨーロッパの方でも、恐い神さまよりもマリアさまなんです。マリアさまに、母性的なものに抱かれるという思いが強いです。

私にとつてもやはり、キリストという方はそういうように私たちを無条件で抱いてくださる方なんです。無条件で抱いてくださる。もし、神さまと自分だけだったら、これは捉えどころがありませんし、どうやって認識していいのかわからない。御意みこころが何なのかもわからない



い。その困り果ててしまうところへ、光となって現れてくれたのがあのナザレのイエスというお方だったんです。そのイエスというお方が福音書の中でビビッドに描かれている。そのお方にぶつかって、そこにその言葉、それから行為、生涯、最後は十字架にぶつかる。そして、死を突破して甦れてきてくださった。これは「復活」と呼んでいますけれども、ヒルティも、

「復活ということがキリスト教の中心だ。十字架で死につばなしの、そんなキリストを信じて何になるか」ということを言う。

「キリストの復活ということがある。だから、我々の生命は地上だけでなく、永遠に続くんだ。しかも、地上の生命と来世の生命はつながっていて、ただそれが変化するだけだ」

と、そういうことも言いまして、非常に共感を覚えるんです。

話をもういちど、私のところへ戻しますと、やはり、キリストという方があのような、人という姿で甦れて、その生き方が全く無私、私無き生き方なんです。愛そのものなんです。己を与えてやまない。そして、いかなるマイナスも全部、自分が背負い込んでしまわれた。そういうお方だからこそ、私は自分を委ねたいというふうに思ったんですね。

### ●まず大切なのは信じようとする意志

(金光) 「イエス・キリスト」という言葉が出ましたけれども、ヒルティはどういうふうに言っているんでしょうか。

(奥田) ヒルティは、「人間は誰でも信じたいんだ」と言うんです。「都合のいいものだったら信じるんだ」と。

(金光) それはそうですね。

(奥田) 「神さまの誠め<sup>いまし</sup>というものは、自分にとって都合がわるいから、そういうふうに生活するのは大変だから、だからちよつと待つてということになるんだ」と。そういうようなことをヒルティは言うんです。

(金光) たしかにそのとおりですね。

(奥田) それでまあ、ヒルティは次のように言います。

「だから、まず大切なのは、信じようとする意志である。

ヒルティはどうも意志の人ですね。意志が強い。努力の人です。だから、信じようとする意志であると言う。

そこからして信仰は始まる。その意志があれば、信仰はたやすく、おのずから成長する。さもなければ、信仰は見出しがたく、またほとんど教えることもできない。

そこでキリストもはつきりこういつている。『わたしを遣わされたかたの誠めを





行ないたいと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教えが神からのものか、それともわたし自身から出たものか、わかるであろう』（53頁）

と。だから、キリストの言われたことを自分で実行したためしてみたらよいと。ところが、「それでなくても、キリスト教はもうとつくに、あまりにも単なる『教義』に墮<sup>だ</sup>してしまつて、多くの人はキリスト教の実力を見ることがないので、もはや教義に耳をかそうともしない。」（53頁）

（金光）それは百年前の現代の人ですね。

（奥田）そうなんです、百年前のキリスト教国なんです。

（金光）2000年代の現代の人でなくて、1800年から1900年の現代の人ですね。

（奥田）そうです。だから、人間というのは変わらないんだなということを思いますね。そして、ヒルティは言う。

「人間は、耳で聞くより、目で見るものを信ずるからである。」（53～54頁）

つまり、百聞一見に如かずと言う。そして、教義ではなくて、実践から始めなさいと。

### ●実践的キリスト教

それで、「幸福に到る道が三つある」と言う。

「実践的キリスト教はいう、正しく行なうがよい、そうすればまもなく信仰が得られるであろう。まず聞き従うがよい、そうすれば見るであろう」と。

まず行為を促してくる。それに対して、

これに反して、教理的神学は言う、まず正しい教義を信ぜよ、そうすれば、おそらくそれに従つて、行なうことができるであろう、と。さらに合理主義者はいう、まず理性的に納得させよ、そうすれば自分は信じ、おそらくそれに従つて行なうであろう——もしそれが自分の性分に合えば、と。

この三つがあると言うんですね。

さて、この三つの幸福へ到る道のなかから、あなたはためしに自分の歩きたい道を選ぶがよい。しかしわたしの考えでは、あなたは第一の道を選らぶ場合のみ、即ち、実践的キリスト教です、

速<sup>すみ</sup>やかに目的地に達することができよう。まず、あなたが信じうることを行なうがよい、それも、あくまでも几帳面に、誠実に、である。その上で、時おり、その先きへ小さく一歩を進めるがよい。

それをまずやってみなさいと。さもなければ、信仰には到達できないんだと。

ただし、その場合、前より具合がよくても悪くてもかまわず、行ないをもつてためしなさい。そうすれば、まもなく信仰に到達できるであろうが、さもなければ、ついに信仰は得られない。」（54～55頁）



しかも、信仰とは一挙に得られるものではない。やはり年月がいるということを言います。

「人間は信仰を持つのが正しいこと、そして、不信仰よりも信仰を持つほうが幸福であることを、みずから経験して知らねばならない——それも、しばしば長いあいだにわたり、苦痛を伴いながら。こういう経験からのみ、単にうわべだけの信仰告白でなく、確固とした信仰、ほんとうの確信が生まれてくる。」

そういう経験を通して本当の信仰が生まれてくると。こんなことも言ってますね。

こうして自分の人生経験によってまず信仰へ導かれた者は、歴史のなかにも次のような事実があることを、たやすく見出すだろう。人類に永続的な影響を及ぼした偉大な英雄は、たいてい、目に見えぬ何かをかたく信じることできた人々であり、これに反して、他の人たちは、それと同じか、もしくはそれ以上の才能を持ちながらも、それほど永続的意義を持ちえなかった、という事実を見るであろう。というのは、何といても信仰はつねに一つの力であつたし、また今後もしもいぜんとしてそうであるからである。」(56〜57頁)

だから、ヒルティは正しい信仰ということをももちろん前提にしております。そして、次のようなことを言います。

「この謎のような人生をのり切って行くには、おもな道はおよそ四つしかない。宿命論か、克己主義か、利己主義か、信仰かである。」(59頁)

誰でもが知らず識らず、この四つのうちのどれかを歩んでいると。もう一度いいます、宿命論、それから克己主義——道德的な克己主義ですね——利己主義、それから、信仰。「第一の道はひとを鈍感にし、第二の道は冷酷にし、第三の道は邪悪にする。ただ第四の道だけが、この世で可能なかぎりひとを善良にし、かつ幸福にする。」(59〜60頁)

それでは一体、何を信じたらよいのかと。

「しかし、それでは何を信じたらよいのか、と、あなたは当然たずねるだろう。」

ここで、先ほどのご質問に対する答えが出てきます。彼は言うんです、

まず、善を信じなければいけない。善なるものがこの世には存在すること、そして、それは悪に対して勝利をおさめる力を持つことを信じなければならぬ。悪の力とその影響はつねに限られていて、克服されうるものであり、いや、原理的には、すでに克服されたものであることを信じなければならぬ。したがって悪にではなく、善に仕えようと決心しなければならない。ここから真の信仰は始まる。」(60頁)

「このように、『善を信ずる人たち』こそ、とりもなおさず現代の大きな教会であつて、これが最も強く団結して、悪に仕える者どもに対抗すべきであろう。」(61頁)

いわゆる制度的教会でなくて、本当に善に仕えよう、神に仕えようとする人たち、これが無



数に散らばっている。その人たちの団結、これが悪に対する抵抗力になると。そういうことを言っているんですね。

### ●キリスト教の信仰の中心はキリストの復活

それで、キリスト教の信仰の中心は何かということ、キリストの復活だということを言います。

「キリスト教の信仰の中心は、キリストの復活である。神を信ずることは、まだ比較的容易である。神は、根底において全く把握できないもの、考えられえないものであるから、いろいろな想像することができ。キリスト自身が言っているように、一つの『霊』であって、いかなる方法をもつてしてもそれは決して定義することのできないものである。」(64頁)

だから、こういう神を信ぜよと言ったら、比較的まだ容易である。ところが、キリストを信ずるとするのは難しいんだということを言っています。

「これに反して、キリストは疑いもなく歴史上の人物であって、霊ではない。しかも同時に、この人物は、他の歴史的人格や一般に人間の本性についてのわれわれの観念とは一致しない、ある非凡な存在である。」(65頁)

人間の本性というのはエゴイストということだと思う。それとおよそ違うお方だ。それでいて、

「しかし、復活という最も明白な歴史的事実——はじめある人数の人が、いや、五百人以上の者が同時に、肉眼で見たと主張するこの事実は、後世の人々の信仰に対して課せられた、きわめて厳重な要求であって、いかに思考をめぐらし解釈の手立てを用いても、これを回避することはできない。したがって、今日なお、だいたいにおいてキリストを信ずると主張する多くの人たちが、この問題で渋面をつくり、そのために信仰の歩みがとまり、やがてたいてい元へ逆戻りする。

後世の人に対してこれを信ずるかというのはまことに残酷な要求であると。どんなに考えてみてもこれは避けることができない問題であると。

しかも、この歴史的事実が本来キリスト教のすべてであった。もし使徒たちにとつて、キリストが十字架にかけられ、墓に葬られたまで終ったならば、キリスト教を世に伝える勇気を彼らは持たなかったであろう。」(66頁)

だから、初期の使徒たちは、キリストが復活されて甦られたという、そのことだけが宣教の内容だったと言っていますね。また、こんなことも言っています。

「復活のことを切り離して考えれば——十字架で死んで、ただ葬られただけの『神の子』など、われわれに何の役に立つであろうか。そういうことは誰も信じないであろう。」



逆に復活という事実からキリストを神の子と結論することは、きわめて論理的に一貫した推理である。もし復活が真実でないとしたら、キリスト教全体が誤謬か、錯覚(だが、いずれにしても、同時に五百人以上の者にそうした錯覚が起こるとはとうてい考えられない)に基づくばかりでなく、まさに虚偽の上に立つことになる。なぜなら、弟子たちの仲間の誰かが、キリストの屍体がどこに運ばれたかを知っていないながら、それを秘密にしたにちがいないからだ。

そのような宗教ならば、わたしは捨ててしまおうであろう。それとともに、この世においてまさに真理を守り給う神に対する信仰をも、当然すててしまうことになる。もしキリストが屈辱にみちた死をとげ、しかも正しい審きを行なう神の力が全然あらわれずに終わったとすれば、誰もキリストと同じ道を歩み、また、すべてのことにキリストを範とする(このことのみがキリスト教であり、キリストの模倣の意味である)真の勇気を失うであろう。そうなれば、悪が勝利を得て、この世における最高の力であることを証明したことになる。ひとは悪の力とおとなしく妥協して、神をお払い箱にしなければならない。」(67頁)

しかしながら、復活というのは事実であったと。

### ●十字架と復活と聖霊

ここで、「復活」ということを力をこめて言ってますけれども、私にとって復活というのはなにも死人が甦ったという、そんな単純な出来事ではなくて、むしろ、かつて肉体をとっておられたお方が霊体となって顕れた。別次元の高次元な生命を顕されたという厳然たる事実だと思っています。

この地上のものはすべて過ぎ去っていくもの、消えていくものです。土から生まれた人間はまた土にかえる。ナチュラルな人間はみなそうです。どんな人も120歳で終りです。けれども、その我々の生命の中に別の生命が植えつけられて、この肉体が滅び去るときに、その生命が顕れてくる。本当の姿を現してくる。本然の姿が現れる。それをキリストは先に見せてくださった。

しかも、十字架というあの残酷な死をみずから引き受けて、私たちの恐れる死を滅ぼした。ご自分の生命をかけて死を滅ぼし、罪を背負ってくださいました。だから、私たちがどんなに惨めな人間であろうと、どんなに出来が悪かろうと、どんなに不信仰な人間であろうと、そういう人間の側の善とか不善とか、そういう一切乗り越えて無条件に救い給うという、この十字架という凄さに本当に我々が砕かれなければ始まらない。安直に受けとってはいいない。これも本当にそのことを知ったら、涙なくして受けとれないです。

そこではもう本当に台風一過、もつと清らかな空気が流れている。霊気が流れている。そこに神さまの霊、聖霊が注がれて、



「私はおまえと一緒に生きるからね。絶対に死なない。絶対に滅びないよ。私は永遠の生命をおまえに与えた」

と、そういう御声が魂に響いてくる。聖書の言が単なる言葉でなくなってきました。これは現実だ、これこそリアリティだという確信を与えてくれる。これが本当の信仰だと私は思います。ヒルティもそういうことを本当の信仰だということを味わってください。私に受けてもらった。

### ●どん底で魂が砕かれてこそ

(金光) 今の日本人は、よくいろんな先生方に聞くんですが、

「まずそれをしたらどうなりますか。結果を聞いて、結果が納得できたらやります」

という、一種の合理主義でしょうけれども、それが一つとですね。それから、ある有名な詩人で亡くなられた方ですけれども、福音書を読んで、

「イエスキマのなさることはまことに立派だ。でも、あまり立派すぎて私はまねができない。だから、近づけなかった」

という、最後は離れたという言葉があるんですが。先生の今の言葉の前の段階のところ、

「私に納得できたら」

という姿勢の人がいることと、それから、

「とても真似しようとしてもできないから、そこでストップした」

という、まあこのタイプは結構多いのではないかと思うんですが。

(奥田) はい、知識人にはそれが多くですね。まず、その「納得できたら」ということについて、ヒルティはこんなことを言っているんです。

「神を信じ、キリストを信じ、目に見える世界とその秩序のほかに存在する、目に見えぬ世界とその秩序を信ずることは、最初はつねに一つの決意である。ひとによつては、それはほとんど絶望的な行為であることさえまねではない。そのような驚嘆すべき事柄の真实性と必然性について哲学的に納得させられるまで待つというのなら、決して信仰に到達することではない。」(69頁)

だから、

「まずは納得するまで待つ」

ということについては、もう決意だと。それから、もしも本当に神なき世界だったら、こんな不合理きわまりないじゃないかと。神の光がさしこんで来ているという、それをやはり受けとって、そこから始まるのではないかということ。それには溝があるかもしれない。だから、決意だと言うんですね。

(金光) ただ、その決意というのも、「よし、じゃ自分は」と頭で決意するのではなくて、やはり、その世界を生きている先人といえますか、先達の生き方を見てみると、



「あ、やはり、そこにひとつの素晴らしい生き方があるな」と思ったら、決意に踏み出しやすいでしょうけれども、頭の中で、福音書を読んで、「じゃ、やるぞ。私は今日からそちらに行きます」というわけにはいかないような気がします。

(奥田) それは私も同感なんです。やはり、本当に信じた人は、どんな状況で信じたかという、私自身を考えてみると、どん底なんです。決して、幸福の絶頂にあるときに、「信じる」なんていう気持は起こりません。

ただ、幸福の絶頂と思えるところにおいても、たえず不安に脅かされています。失われるのではない。愛する者を奪われるのではない、死によって、病によって、運命によって。そういうことにおびえていなければならない。そして、だんだん、そういう不安が嵩じてきますと、自分の身体も弱ってくる。精神的にまいってくる。人生が重荷になってくる。

私の22歳、23歳の頃は毎日毎日が本当に辛かったです。もう本当にどん底だったときに、ある人を通してキリストの光が射してきた。やはり、なにか人生のどん底、自分にとつてこれは避けたい、欲しくないということの中に突き落とされたときに、はじめて光が射し込んでくるのではないかとことです。だから、これは「納得」ではなくて、もう「せざるを得ない」という、それはひとつの恵みだと思っただけです。

よく、魂の砕けとかいう。いろんな苦難をとおして、人間の魂が砕かれていく。「俺ほど偉いやつはない。俺は何でもできる。俺は欲すればどんなものも手に入れられる」という、こういった傲慢な思いがことごとく破壊されて、

「本当に自分は無力だ、もう死ぬほかない」というところまで砕かれていく。

「もう死ぬほかない」という思いにとらわれている人に対して、ヒルティはおもしろいことを言っているんです。

「誰のためにも生きたくない。兄弟のためにも、親のためにも生きていたくない。そういう人は、神さまのためにだけでも生きてやってくれ。神の栄光のために、おまえは生きてやってくれ。神は、おまえが死ぬことを望んでおられないんだ。せめて、その思いに到達してほしい。」

というようなこともヒルティは言っているんですね。とても共感できましたけれども。

### ●信仰に対する障害

それから、本当の信仰というものに対する障害についてヒルティが述べているところをちよつとご紹介してみたいと思うんです。

「さしあたって信仰を妨げるものは、前にも述べたように、信仰を持たない人たちの知性があまりにもすぐれているからではない。そういう多くの人々は、そのた



めだけならば、立派に信仰を持つことができよう。

また、信仰の対象が、単に信じがたいという点だけにあるのでもない。どんな人でも、キリスト教の真理よりもっと未知な、それ自体もっと真実らしくないことを、かす限りなく信じているのである。

何かを、いや、多くのことを、信じているのでなければ、およそ生きることも不可能だし、人々と交わり、人事を処理していくことも全くできないであろう。

そうではなくて、信仰の第一の障害は、通常、不合理な教育にある。教育は、子供たちが自分ではまだ全く経験を持たないのに、ただ教師たちの尤もらしい言葉だけを聞いて、信仰を持つように要求される。」(72頁)

教育問題です。日本ではあまり宗教教育はやりませんから、そんなことは出てきませんけれども。

(金光)でも、宗教ということではそうかもしれないかもしれませんが、やはり、先生自身の生き方といういいですか、それがどう確立されているか、それによって影響を受けるか受けないか、子供たちが信用するかしないかという、そういう問題は日本でもあるわけですね。

(奥田)私は、日本の教育問題の一番根底は、子供たちが、

「あんな素晴らしい大人になりたいな。あんな素晴らしい大人の足跡を自分も踏んでいきたい」

と感ずること、これだと思うんです。

卑近な話でいいますと、プロ野球の選手にあこがれている子供たちは多いでしょ。それはやはり、イチローだとか、桑田だとか、いろいろなそういう選手たちのたゆみない努力、本当の野球に到達するためにもの凄い努力をやっている、その姿にうたれて、自分もああなつてみたいというあこがれの的なんです。憧れがあつて初めて努力が始まるんです。

大人たちが仕事においても、人間の生き方においても、

「あの大人は素晴らしい。ああなつてみたい」

という、そういうモデルを示さなければ、言葉ではだめだと思えます。老人のつとめは、後世の人たちに、あとに続く者に、

「人生とはこんなに素晴らしいんだよ。どんなに紆余曲折があつても、苦しいことがあつても、しかし、人生は素晴らしい。しかも、なおさらに輝いている。私は老いぼれてはいないよ」

という、精神のみずみずしき、それを現して、勇気を与えてやることだと、私は思います。それがどんな職業の人でも、どんな境遇の人でもできるんですね。ヒルティも同じようなことを言ってるんですけれども。それが日本の社会で、幸福というのは非常に浅薄なもので、財産を築くこと、名声を得ること、地位を築くこと、そんなことで終っていたら、残念だと思えます。



（金光）昨日のお話にも、「年とつて身体が衰えるのはやむをえないことであっても、それで終りではない。そこにもうひとつ生き方がある」というようなお話がありましたけれども、やはり今のところに通じるわけですね。

（奥田）そうなんです。

（金光）他にもいろいろ障害はあるのではございませんか。

（奥田）彼は、第二の障害と言つて、信仰にふさわしくない生活であると言つていんです。

「第二の大きな障害は、信仰にふさわしくない生活である。もし生活がキリスト教の教えにかなったものであれば、たとえそれがただ意志だけで、まだいろいろの弱さが残つていようと、普通なら実に困難な信仰が、まったくひとりでに成長して行くのである。」

生活をともなわない信仰がほんものでないことは、信仰の否定者でも知つている。彼らは、信仰にふさわしい生活をしたくないので、もしくは、そのような生活は不可能だと考えているので、むしろ生活そのものを捨てるのである。これが彼らの不信仰の主な原因である。」（73頁）

これはさっきの、キリストのようなのは立派すぎるという意見がありました、これも私からみたら、非常に誤解されているんですね。

### ●無者キリスト

私の恩師の小池辰雄という先生は、その『無者キリスト』という本の中で書いておられました。

「キリストはご自分を何者ともなさつていなかった。ご自分を何者ともなさらなかつた、本当に全くエゴ、自我がないかただった。そこに神さまという素晴らしいものが100%に宿つた。そこからひとりでに神の国が流れ出てきた。そういう人の生き方はあの山上の垂訓に言われているようなことにならざるをえない。」

あれは教えではなくて、キリストご自身の内面の告白である。だから、『すべし、すべからず』ではない。『本当に生きたら、こうなるよ』という、それを正直に告白されただけであつて、決してあれをモデルにせよとは言つておられない。」

ということを言われた。これは私にとつてうれしいお話だったんです。

（金光）無の者と書いて、「無者キリスト」と言われたわけですね。

（奥田）はい。己が無い者です、虚無ではないんです。己が無くなつていると、無限のものが宿つている。それがキリストの場合に、

「幸福なるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり。」（マタイ5・3）  
ということですよ。





「霊が貧しい」ということはさもしいのではない。空っぽ(無)です。神さまの前には主張すべき何ものもない。自分はナッシングだ。そうしたら、神さまという永遠なるもの、無限なるものが入りこんできた。それは永遠の生命で、しかも愛であった。それがひとりでキリストを通して流れていった。

しかし、もちろんその前提としては、キリストはあの荒野の試みを体験しておられますものね。ヨルダン川で洗礼を受けて、天が開けて聖霊が鳩のごとく降<sup>くだ</sup>ってきた。「おまえは私の悦ぶものだ」という御声に続いて、御<sup>みたま</sup>霊によつて荒野に追いやられて、四十日間、試みにあわれた。あの三つの試みです。

「石をパンに変えてみる」

「高い所から飛び下りてみる、天使が助けるぞ」

と。この世の栄耀栄華を示して、

「私に跪<sup>ひざまず</sup>いてごらん、みんなあげるよ」

という試みです。

(金光) 今なら、みんな飛びつきますね。

(奥田) そう、みんな飛びつく。キリストはそれを全部、

「神のみ」

と言つて否定された。それを四十日間、戦いぬいて、それからやおら伝道に行かれた。だから、あんな素晴らしいことが展開したんですね。やはり、そこをしっかりと見てほしいんです。

だから、人間はできないとか、キリストは素晴らしすぎたとかいうのではなくて、

「そんな素晴らしいものを、私はおまえたちにあげたいんだ。じゃましているものをまず取り除くよ」

というのが十字架だったんです。

「おまえたちのエゴ、それを全部、十字架で引き受けているから、心配いらん。本当に私のところに来てごらん。そしたら、私と一つになるよ」

と言う。これではなければ、私は救われない。もし、人間の立派さだとか、何か努力精進といったようなものが条件だったらもうそれはだめです。これは無条件です。よく、小池先生は言われた、

「みなさん、空気は無条件で吸っているでしょ。意識しないで吸っているでしょ。空気は誰でもが無条件で吸えて、手にいれるものですよ。意識もしないでしょ。それでなくてはいけない。神さまの愛とか、神さまの恵みというのはそういうもの。知らずして、それに包まれている。気づかないだけだ。」

太陽の光を見てごらん、何十億年も前から輝きつづけて、人を照らして生命<sup>いのち</sup>づけてきた、あの自然界の太陽を。霊界の太陽はキリストだ。太陽は、外へ出て光を浴びればひとりで、何十万人であろうと等しく太陽の熱や光は届いているで



はないか。それを受けとりさえすれば、心を開けばいい。キリストだって、そのようにして、もうそば近く来てくださっているのに、我々はそれを戸を閉じているだけだ、心の扉を。だから、心を開くんだよ」

と。ヒルティは「己を捨てなさい」とか、何々をしなさいとか言うんですよ。でも、そうじゃない。捨てられない自分をも、なお救ってくださいさるキリストの素晴らしさ。これを本当に知ったら、もう無条件降伏です。もう勝手な思いはなくなりませう。私はそう言いたいですね。(金光) 捨てられない自分が、じゃ捨てられないからだめだというのではなくて、その捨てられない自分をもちゃんと救ってくださいさると。では、その捨てられない部分はどんなるんですか。

(奥田) 消えていきますね。包まれますと、いつしか、自分を邪魔していたいろんなこの世界的なものが自然に消え去っていくんです。それはやはり、老齢に達してよいよそうなると思いますよ。若いときは、どうしたっていろんなものが盛んですから。性欲にしたって何にしたって、そうでしょ。年とるにつれて、そういうものは消え去っていきます。そこへ達するまでは、戦いがあっても、それはもう気にしなくていい。常に神さまに、キリストに心に向け、キリストに委ねていけば、その他のことはもう根底において片付けられているんだということですよ。これが私にとって救いですね。それでなければ、やりきれないですよ。

### ●信仰は最初からすでに無条件

(金光) ま、そこで片づいたようですけども、まだまだしかし、普通の場合には邪魔になるものがあるんじゃないですか。

(奥田) ヒルティさんに戻りますと、信仰にふさわしくない生活ということの次に、

「なぜなら、信仰というものは——この点をよく注意してほしいが——一方において、それを自分自身でためして、その真理をしだいに経験することができるし、またそれは必要でもあるが、しかも他方、信仰は最初からすでに無条件でなければならぬからだ。すなわち、信仰について、いわば一種の妥協を行ったり、そののみか賭けをさえして、もしこれこれのことが成就したら信じよう、などといったてはならないのである。」(73〜74頁)

と。一種の妥協を行なったり、こんなことが起こったら信じてやろうとか、そんなことではだめだと言うんですね。

「多くの人たちは、自分が期待する神の助けの在り方についても、実にはつきりした形で空想する。そして神の助けが、ちょうど予期どおりに現れないときは、何の理由もないのにすっかり絶望する。いや、時にはその助けが来ているのに、それでも絶望する者がある。」(74頁)

それから、



「信仰の障害として最もありふれた、日常見うけるものは、貪欲、なべての思い煩い、所有欲、名誉心である。これらすべては、全能の神と神の守りを信ずる真の信仰とは、およそ正反対の意向から発するものだからである。」(75頁)

もし、宗教家があるものに惑わされているようだったら、そういう宗教家は信じてはいけませんよということを言ってますね。

(金光) その点だけでも、かなり整理できますね。貪欲とかいろんなのがあると、これは正しい宗教でないよ。

(奥田) ええ。そうですね。

「だから、たとえばある宗教家が、金銭や財物や名声をあまりにも重んずるのを見たら、その人がどんなにそれと反対の説教をしようとも、まだ弱い、不確かな信仰しか持たないものと断じてよろしい。」(75頁)

と。それから、不信仰とは、人が知ってはならないことを知りたがること、たとえば、来世のこととか、いわゆる霊的なこととか。それもいけないよ。それから、宗教的享樂。あつちの教会をのぞいたり、こつちの教会をのぞいたり、宗教巡りをやってみる。これもいけないということも言ってます。また、時には学識というものも邪魔になることもありますよ。信仰は非常にシンプルなものだと言ってますね。それから、キリスト教を何がなんでも擁護しようなんて、これもいけないということも言えます。

「真のキリスト教に最も適した自然的性向は、生まれながらにそなわった健全な良識であり、それがさらに、よい道徳教育によって育成された場合である。」(79頁)

ヒルティは「健全な良識」ということを言います。良識にかなわない——あるいは常識といつてもいい——健全な常識にかなわない変なもの、断固拒否しなさいよ。ナチュラルなものだということを一方向で言ってます。

### ● 聖霊のバプテスマ

それから、

「もちろん、そういう性向や教育に加えて、生涯のある段階において、人によればほとんど気づかないほど徐々に、また他の人の場合には驚くほど突然に、ある説明しがたい事が起こらねばならない。それは神の恩寵、召命、救済、聖霊の施与これは「聖霊のバプテスマ」とも言いますね、

と呼ばれうるものであつて、これなしには、どんな人間の美德や知恵にもつねにどこか凡庸さがつきまとい、それを実地に用うるにあたつて不安定をまぬかれな

い。」(79頁)

と、そういうことを言ってます。ヒルティは、「聖霊」ということの大切さをものすごく言つて箇所がありますので、それもちよつとご紹介しておきたいと思ひます。



「疑いもなくキリスト教は、福音書に聖霊と呼ばれているあの霊を通じてのみ、完全に理解せられるのである。聖霊がどんなものであるか、われわれはそれを知らない。われわれが知りうるのはただ、それが極めて現実的な現象であって、われわれの生活にその作用がまざまざと現れ、世間で最も大切な宝とみなされているもの、欠くことのできない享樂と思われている一切のものに対して、次第々々にわれわれを無関心にする力を持つものであるということである。われわれはこうした自由に到達するという召命を受けているのである。果たしてそれが達成されるか、前にはたしかに疑わしく思われたこともあるが、今やキリスト教の信仰によってそれが可能となったのである。」(『幸福論(第二部)』274頁)

と。百年前にそういうことを言っております。

(金光)「聖霊」というのは、ギリシア語では「プネウマ」ですか、要するに「神さまの息吹」という意味だそうですね。日本で「霊」というと、何か変なかたまりみたいなものを想像するかもしれませんが、いわば神さまの息吹でありますということですね。風のようなといいますが、働きであって、何かフワフワ飛んでいるようなものでないわけですから。

(奥田)それはいみじくも、キリストがヨハネ伝のニコデモとの対話の中で仰っています。

「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることができない。……だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない」(ヨハネ 3:33-35)

と言われて、ニコデモさんは非常に驚いたという。風は思いのままに吹いている。でも、その風というのは一体どこから来て、どこへ行くのかわからない。新しく生まれるということもそういうことだと。上から新しく生んでもらう。これが必要だということニコデモとの会話の中でおっしゃっているんですね。

(金光)現代の忙しい生活だと、やはり、その辺のところを全く無視して日々の仕事に夢中になっている。ということになると、その仕事ができなくなると、絶望というような方へ行ってしまうということになるわけでございます。

### ●老年における心得

(奥田)ヒルティは非常に、規則正しい生活ということが必要だということを言うんですね。老年に達した者の、老年における心得ということの中でそのことも言っていますので、ちょっとそれもついでながらご紹介したいと思います。

「老年における大きな欠点であり、またそのさまさまの衰弱の原因ともなるものは、過去をふり返ることである。たとえそれが、たんに自分の頭の中だけであろうと、他人との思い出話であろうと、日記とか回想録、ないしはそれに類するもつと世



間目当ての企てにおいてであろうと、かわりはない。

誠実な心と、そのうえ明晰な頭脳の持ち主ならば、そのような回想によつて、かえつてただ悲しい気分をそえられるだけである。なぜなら、どんな人の生涯も、かずかずの大きな誤りを犯し、貴重な時間を空費し、善をなすための才能や機会を利用しないままに残したという経験を持たないものはないからである。

老年において過去を偲ぶならば、むしろただ概括的に、かつ神に対する感謝の気持をもつて、しななければならない。神はわれわれを多くの不幸と不正から守り、虚栄心や享楽欲のきずなから解放し、自分ではどうていなしえないほど万事をよくくなし給うたからである。主としてこのような気持をもつて望むのが、過去に對する正しい態度である。

老年になれば、以前にもまして、日々の思いも行ないも、現在と未来に向けられていなければならない。現在でもなおなしうる一切の善きことをなし、来世におけるはるかにまさった活動を(それがどのような性質のものかはあまりせんさくせず)悦びをもつて信じ、そして過去にこだわることも、死を怖れることと同様に、自由な人間にはふさわしからぬものとしてそれを斥けることである。おそらくこうした態度は、たとえ年をとること自体を防ぎえないにしても(中略)、できるだけ健康な、精神的に澆刺とした老年を迎えるための最上の処方であろう。」(178〜179頁)

そして、休養が大切だということを言ひまして、睡眠というのが大事だと言う。それから、「睡眠とならんで、日曜日は神の意にかなった休養の時である。

と。日本人がもうウィークデイも日曜日ものべつまくなしに働いている。そして、外国の人から、あるとき「エコノミック・アニマル」と言われてさげすまれた。これはやはり、見直さなければいけない。規則正しい生活というのは、働く六日間とそれから休息する一日、それとのリズム、バランスの上に成り立つと思ひます。それで、ヒルティはこんなふうに言ひます。

これを規則正しくまた有効に利用する者は、休暇や「息抜き」をせひとも必要とほしめないであろう。やむをえない場合は、一年を通して週『六日働く』こともできらるであろう。

もし神が大昔に与え給うた掟の眞実性が、何らかの点で、現代の上流階級の人たちにふたたび明らかに示されるとすれば、まさにこの事においてであろう。この平常のきまつた休養を正しく利用していれば、病後の場合をのぞいて、特別な休養を必要としない。そうしてさえいれば、いつも健康な眠りのあとに、または合理的に過ぎされた一週間ごとに、体力は全くひとりで回復する。

ときおり、それ以上の休養が必要であるかのように思わせるのは、始終はたつきつづけてやまぬ空想のせいすぎない。さもなければ、過度の仕事の焦りか、



あるいはまちがった生活の仕方から生ずる過労のためである。」(181頁)

### ●仕事と喜びと感謝

また、こんなことを言います。

「睡眠や日曜日の休養とやらんで——いかにも逆説めいて聞こえるが——仕事(つまり仕事の中の気分転換)が最上の休養である。仕事は人間の義務であり、使命でもあって、それを果たさなければ、この世では精神的にも肉体的にも健康な生活を送ることができない。仕事を避けてただ無為な生活を送ろうとしたり、少なくともできるだけ早く『引退したい』と願う人は、最大の愚か者である。それはとんでもない思いちがいである。適度な仕事は、ただ休んでばかりいるよりも、健康を長く維持し、また、おおよそ『われらに与えられた分』でもある。」(182頁)

そんなことを言うんですね。そして、

「最後に——喜びは、しばしば身体全体に新しい活力を与え、ひとりでの活動したくなるように促す特效薬である。同様に、あらゆる事物や人間を、たえず静かな喜びをもつて受け取ることも、大いに健康的であつて、その効果はてきめんなくとも、おそらくいつそう長つづきするであろう。喜びは健康が外に現れたものである。」(183～184頁)

それから、喜びというのはある程度まで努力してつくり出せるんだということを言います。「すなわち、喜びはある程度まで努力してつくり出すことができる。しかもごく簡単な方法によつて。まず第一に、自分の持っている良きものに目を向け、その価値を認めて感謝することである。

自分というものは尊い存在だ。誰にもいいものがある。そういう良きものを認めて、その価値を認めて感謝することである。感謝は喜びにきわめて近い感情である。次ぎには、他人に喜びを与えることである。これは誰でも、病人でさえも、できることであり、ひとに親切をする機会は、つねに、どこにでも十分にある。

病んでいる人だつて、微笑みでもつて、お見舞いに来てくれる人を逆に勇気づけることはいくらでもありますからね。

それをわざわざ求める必要はほとんどなく、向こうからこちらを求めて来るものである。……すなわち、手あたり次第に隣人から始めなさい、と。もし誰ひとりいなかったら、かわいそうな動物か、植物から始めてもよろしい。汲みつくせぬ愛の泉を心に持てば、このような生き物にもそれは注がれ得るし、また実際そそがれるだろう。とにかく誰でも、とりわけどんな病人でも、言葉どおり『隣人』を十分に持つている。自分が病苦に耐えているその忍耐力によつてだけでも、こ



の隣人たちに喜びを与えることができるのである。」(184～185頁)  
と。そうなることも言っています。

(金光) テレビで百歳をこえた人なんかの紹介をみますと、何かやはり、仕事をなさっている。そして、具合が悪いときでも、感謝を述べていらつしやる。やはり、そういうのが世の東西をとわず共通している、人の老年の過ごし方だということになるわけでございます。

(奥田) ヒルティがシンプル・ライフということを言うんです。本当に単純な生活、その中に本当の喜びがあるということをやっていますので、私もそれをひとつの目標にしていきたいと思えます。とにかく、この世のひとは、持つことを、そして持つたら手放したくないということをやります。人間はしょせん、何も持って向こうの世界に行けない。内面的なものだけが向こうにつながっていく永続的なものですから。それをどれだけ豊かに内側にたくわえるか。それは必ず人にいい影響を与えていくんですね。私はそう思います。

(金光) そこに幸福への道があるということでございます。どうもありがとうございます。

(小冊子『幸福への道』2008年4月17日発行より転載)

